



# 紀 要

第 24 号

—設立40周年記念号—

2011.3

財団法人 滋賀県文化財保護協会

## 将棋史研究ノート（5） 金将の役割

### —金将の動きと配置から—

三宅 弘

はじめに

将棋はインドでその原型が起り、日本へは中国・朝鮮半島経由もしくはタイなど東南アジアを経て伝えられたと言われている（増川1977・大内1986）。その時期は明確ではないが、6世紀から10世紀頃の間で諸説が入り乱れている（木村1990・尾本2002）。

考古学的には、天喜6（1058）年の紀年銘木簡と共伴した奈良県興福寺旧境内遺跡出土の将棋駒（清水・小栗1993、1994）が現在の将棋駒と形や文字までもが同一であり、12世紀頃に成立したと考えられる事典である『二中歴』の記述でも、現在とほぼ同じといえる駒の動きや並べ方などが説明されている。

伝わった時期は置いておくとして、少なくとも平安時代には今と同じ形で将棋が指されていたと考えられる。つまり、千年もの間将棋の基本的な部分は全く変わっていないということであり、翻れば平安時代に日本の将棋は確立されたと言える。

では、確立する以前の将棋はどのようなものであったのであろうか？ また、どこから日本へ伝えられたのであろうか？ それを考える上での一つの試みとして、金将の駒を取り上げてみたい。日本の金将駒に相当する各地の駒の動きを比較観察することによって、日本への伝わり形が分かると思われるからである<sup>(1)</sup>。

#### 1. 金将とは

将棋が日本に伝えられて以降、最も古い出土駒である奈良県興福寺旧境内遺跡から出土した4枚の金将の駒（図1）は、形や文字などが現在の駒と同じであるといえる。もちろん、その他の駒も何等変わったところが無いのであるが、飛車や角行など後世に付け加えられた駒に比べれば、その歴史は古いと言える。

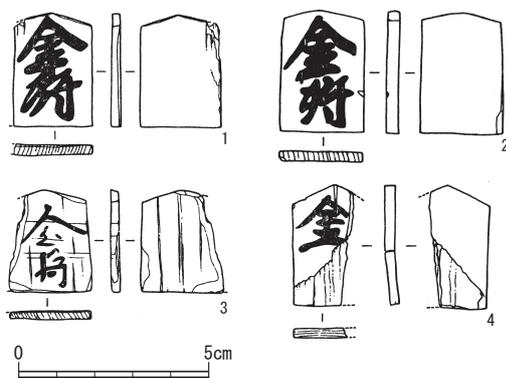


図1 興福寺境内跡出土金将将棋駒

現在の将棋における金将の特徴は、

- ①王将の両脇に置かれている（二枚存在する）<sup>(2)</sup>、
  - ②王将を守る駒であると認識されている<sup>(3)</sup>、
  - ③裏面に文字が書かれていない、
- 等である。

①については、対局前（ゲーム開始時）に並べられた駒を見れば一目瞭然なのであるが、王将の駒の両隣を占めている。これは、いかなる理由か？

②については、王将の駒の隣にいる必然性から考えられなくもないが、何故守っていると言えるのか？

③については、その他の駒には裏に何かしら文字が書かれてあるのに対して、王将と金将には何も書かれていない。これはどういう意味か？

以上、三つの特徴について考えながら動きに注目して金将という駒を理解していきたいと思う。

#### 2. 金将の動き

金将という駒の動きをご存じだろうか？

図2に示すように前後左右と斜め前の六方向には動けるが、斜め後ろの二方向には動けない駒である。斜め後ろに動けないと言うことは、そこに性能上の欠点があるということである。後方の三方向のうち、二方向に駒の効きが及ばないと言うことは、後ろから攻められると弱いと言うことが言える。すなわち、前方に動く（動かされる）ともろさが出るということである。これはゲームとして見た場合、前方に誘えば裏ががら空きになるということの意味している。

また、斜め後ろに動けないと言うことは、後退する時には真っ直ぐにしか戻れないことを意味している。即ち、後退速度が遅いと言える。その反面、前面と側面の五方向には動けるので、そちらの方面には極めて強い駒であると言える。

金将と平安小将棋で使用されていたその他の駒の動きを比べてみる。平安小将棋は、『二中歴』に駒の動きが記されており、現在の将棋の駒とは飛車と角行がないのみで、その動きや成ったあとの名称など全く同じである。

王将は自分の周囲の八方向に動くことができる。王将は戦いにたとえるなら王様であり、敵から攻撃の目標になる駒である。自在に動けなくては敵の攻撃をかかわることができないので、最も自由に動くことのできる駒となっている。

銀将は前三方向と斜め後ろ二方向の五方向に動ける駒である。この駒は、前後の動きには極めてスピーディーではあるが、左右には動きがとれにくい駒である。

桂馬・香車・歩兵については、駒の動きが前方のみに限定されており、前三者とは性能の点で劣ると言わなければならない。

以上、それぞれの駒の動きを見ていくと、金将は駒の動きが最も王将に近く、また最初に置かれる場所も王将に近い駒なので、王将とともに移動することが他の駒に比べれば、容易であると考えられる。従って、王将を守る事にかけては他の駒より数段有益であると考えられることから王将の傍に置かれていると考えられる。

### 3. 将棋のルール

将棋には、当たり前であるがルールがある。将棋のルールは基本的に平安時代（最古の将棋駒が見つかった時期）以降、大きな変化がない。以下、現行将棋で使われている用語のうち、今回に関係のある用語および指将棋のルールを記す。

#### a. 将棋の用語（現代日本）

- ・王手…次に相手の王将を取れる状態になること。
- ・詰み…王将が他方へ逃げることもその駒を取って王手を避けることもできない状態になること。
- ・成り、成る…敵の陣地の奥から三段目以内に到着した駒は裏返す事ができる。また、敵陣三段目以内から手前に動いた駒でも成ることができる。

#### b. 駒の動き（図2）

- ・王将…自分の周囲八方に一マスずつ進むことができる。

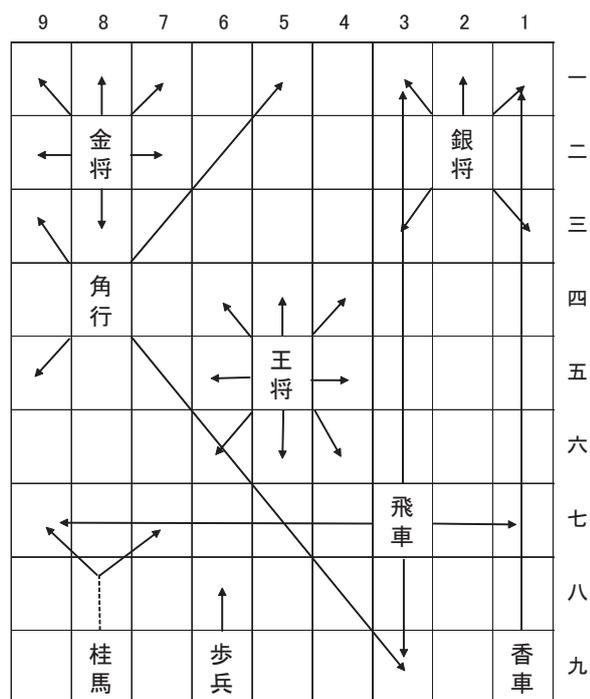


図2 将棋の駒の動き (表)

- ・金将…前後左右に一マス、斜め前に一マス進むことができる。
  - ・銀将…斜め前後に一マス、前に一マス進むことができる。
  - ・桂馬…前に一マス、そこから斜め前に一マス行ったところに進むことができる。また、他の駒があっても飛び越えて進むことができる。
  - ・香車…前方に真っ直ぐ盤の端まで進むことができる。但し他の駒を飛び越えられない。
  - ・歩兵…前方に一マス進むことができる。
- ※桂馬以下の駒は、後ろに進むことができない。
- ・飛車…前後左右方向に盤の端まで進むことができる。但し他の駒を飛び越えられない。
  - ・角行…斜め前後に盤の端まで進むことができる。但し他の駒を飛び越えられない。

#### c. 成った場合の駒の動き（図3）

- ・王将…成らないので動きは変わらない。
- ・金将…成らないので動きは変わらない。
- ・銀将…（成銀）金将と同じ動きになる。
- ・桂馬…（成桂）金将と同じ動きになる。
- ・香車…（成香）金将と同じ動きになる。
- ・歩兵…（と金）金将と同じ動きになる。
- ・飛車…（龍王）飛車の機能に王将の機能が加わる。
- ・角行…（龍馬）角行の機能に王将の機能が加わる。

### 4. 駒の比較—金将に相当する駒の名称と動き

金将に相当する駒（王将に相当する駒の真横に置かれる

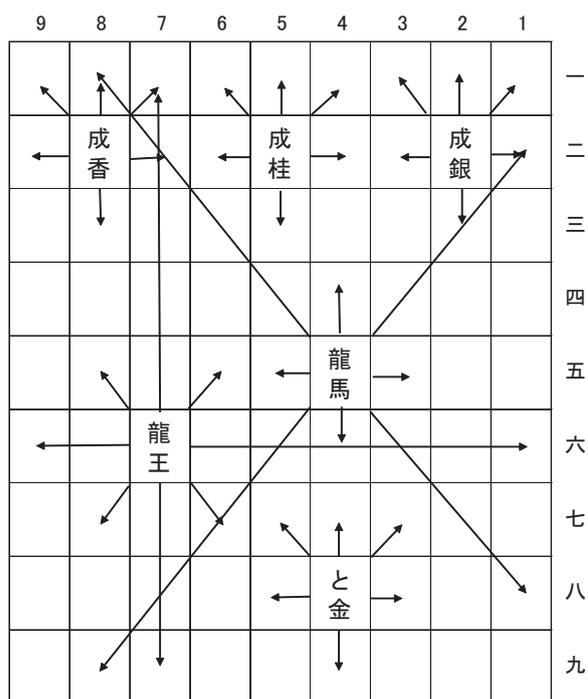


図3 将棋の駒の動き (成駒)

駒)を日本以外の駒と比較してみる。日本の金将がどの駒から変化したのかを考えるための材料になるものとする。

インド(チャトランガ)…ハスティ 斜めに二マス動くことができる(間に他のコマがあっても飛び越せる)。

中国(象棋 シャンチイ)…士・仕 斜め四方に一路進む。王宮内しか動くことができない。

朝鮮(将棋 チャンギ)…士 日本の王将と同じ八方に一路動く。王宮内しか動くことができない。

タイ(マークルック)……メット 斜め四方に一マス進む(昔は角行と同じ動きをした)。

ヨーロッパ(チェス)……クイーン 飛車+角行の動き(縦横斜め前後にどこまでも動くことができる)。

日本(将棋)……金将 縦横に一マスと斜め前に一マス動くことができる。

これらを見てみると、金将は士・仕やメットに比べれば幾分強くなっているが、ハスティや士、クイーンに比べれば動きが弱いといえる。特に、金将以外の駒は斜め方向に強いことが分かる。これはハスティの動きを基本に変化させてきたものと思われるが、クイーンの大きな動きに対して士・仕やメットは機能としては縮小している。想像するに、アジア方面(東)へ伝わったときにこれらの駒が王を守る駒に変化したためであろうか。

チャトランガのハスティは日本では「象」と訳されており、他の駒と名称が異なっている。シャンチイやマークルックには「象」に相当する駒はそれぞれ象・相やコーンと呼ばれており、動きは象・相が斜め前後に二路進め、コーンは日本の銀将と同じ動き方をする。チャトランガが中国やタイに伝えられた時に「王」と「象」の間に駒が追加されたと考えると理解しやすいと思われる。従って、ハスティとシャンチイやチャンギ、マークルックなどの駒は性格が異なるものと考えられる。後者の駒と将棋の金将との関連は駒の動きがやや異なる。将棋の金将はチャンギの士の動きがやや弱められた(斜め後ろに下がることができない)ものと理解すれば朝鮮半島経由からの影響が考えられる<sup>(4)</sup>。

### 5. 出土例(表1)

日本各地の遺跡から出土している将棋駒は367枚であるが、そのうち、金将駒は以下の33枚である(表1)。

なお、表1には、隣接地域の韓国新安沖海底船出土例も参考事例として加えた。

### 6. まとめ一駒の裏に文字が書かれていない理由

金将駒の裏に文字が書かれていない理由であるが、実は、裏に文字が書かれていない駒は金将だけではない。王将も駒の裏は何も文字が書かれていない。これらの特徴を

表1

No.	遺跡名	時期	出土枚数
1	興福寺旧境内遺跡	1058年	4
2	石名田木舟遺跡(第1次)	1585年以前	1
3	中尊寺境内金剛院跡	12世紀前半	1
4	今小路周辺遺跡	13世紀前半	1
5	千葉地遺跡	13世紀末	1
6	鳥羽離宮跡(第59次)	鎌倉時代頃	1
7	鶴岡八幡宮	鎌倉時代末期	1
8	観音寺城下町遺跡	16世紀中頃	3
9	一乗谷朝倉氏館跡	1567年下限	11
10	石名田木舟遺跡(第2次)	11~12世紀頃	1
11	葛西城跡	16世紀前半~17世紀前半	1
12	大坂城跡	16世紀頃	2
13	大坂城三ノ丸跡	1598年以前	1
14	高槻城三ノ丸跡	18世紀末~19世紀初頭	3
15	大坂城跡	江戸時代	1
参考	新安沖海底船	1323年頃	2
合計			35

私なりに考えてみた。

現在の将棋は、相手から奪った駒を空いているスペースならどこにでも(禁止事項に触れない限り)打ち込むことができる。平安時代の将棋では、相手から取った駒の再使用は認められていない。しかし駒は敵陣三段目に入るか、敵陣三段目から戻る時に成れるのである。従って駒が成るためには、敵の攻撃を避けつつひたすら敵陣に向かって突き進むこと以外にない。

また、金将より機能の低い駒は、成れば金将と同じ機能を有する駒になる。と言うことは、銀将以下の駒は敵陣まで生き延びれば金将に昇格できると言うことを意味している。

金将の駒の裏側に文字が書かれていないと言うことは、敵陣三段目に入った時に成ることができないと言うことである。成ることができないと言うことは、成らなくていい(成る必要がない)駒であると考えられる。これは何を意味しているのであろうか。そこから導き出されることは、敵陣に入る必要性がない駒、即ち自陣でのみ活躍することを期待されている(もしくは想定されている)駒であると言うことが言える。これは、王将の駒にも言えることであるが、特に王将=王様と言う図式は自陣(=自分の城・砦)で多数の見方に守られていると想定される。従って、よほどのこと(敵に攻められて落城したような場合)以外では王将は自陣を離れない、もっと突き詰めれば離れてはいけない駒であったと考えられる。王将がそうであるならば、その周囲を守っている金将も自陣を離れて動くわけにはいかない駒だと考えられる<sup>(5)</sup>。

参考になるのは、シャンチイやチャンギ(現在のルール

ではあるが）では、日本の王将にあたる駒（シャンチイは将と帥、チャンギは漢と楚、敵味方で名称が違う）は、九宮と呼ばれる王宮（自分の城に相当）からでることができないのである。もちろん、王将に従う金将にあたる駒（シャンチイは士と仕、チャンギは士）も九宮から出ることができない。ということは、士・仕や士は、将と帥や漢と楚などを守るためにどこまでも付き従っていく駒であると言える。

このように考えていくと、日本の将棋の伝わり方を何やら暗示させるような感じがする。平安時代の将棋においては、金将は相手を攻める駒ではなく、王将を守る事に特化した（役目を割り振られた）駒なのではないだろうか。将棋が日本に伝えられた時（少なくとも興福寺駒が出土した11世紀中頃以前）に金将の駒は、王（玉将）を守る役割を負ったものと考えていいように思われる。

また、平安将棋で銀将以下の駒がみんな「金に成る」と言うのは、飛車と角行が登場していない当時の将棋では、特別な駒である王将を除けば最高位の駒が金将であり、それだからこそ敵陣に進んでいけば金に成るのである<sup>(6)</sup>。

## 註

- (1) もちろん、金将の観察のみから将棋の日本への伝播や伝来時期が解明できるとは考えていないが、金将の駒を観察することによってそれらを解明する手だての一つになることは間違いないことである。
- (2) 古代インド将棋（チャトランガ）やタイ将棋（マークルック）などがそうであるように、王の横に金に相当する駒が一つだけ並べられる将棋が存在する。日本の平安将棋においても、王の横には金が一つの場合と二つ（両側）の場合が、かつて想定されたことがある（増川1977）。
- (3) 興福寺旧境内出土駒で玉将が出土しているように、将棋が日本に伝えられた頃には王将ではなく玉将であったという考えが主流であるが、ここでは一般的な王将を使用することにする。
- (4) 現在、将棋の日本への伝来ルートは、タイなどから南西諸島を経由したとの考えが有力であるが、金将の動きのみに関しては、朝鮮半島経由も考えられるのではないであろうか。
- (5) 王将が伝来当初は玉将であったという考えに立つならば、将の字の上に玉という貴石宝玉を置いたとされる増川宏一氏の説が思い起こされる（増川1977）。最古の駒が出土した平安時代においては、この玉はすなわち戦をする将軍ではなく、都にあって日本を治める天皇のことではないだろうか。
- (6) 飛車、角行は出現の新しい駒であるが、成れば元の機能に王将の機能がプラスされる。それ故、飛車、角行が小将棋に登場する時に将棋のゲーム性が高まり、成る時に元の機能に

王将の機能が加わったといえる。

## 文献（著者名・刊行機関名50音順、刊行年順）

- 池田正男・狩野 陸・酒井重洋・島田美佐子・中川道子・深堀 茜（2002）『石名田木舟遺跡発掘調査報告－能越自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘報告Ⅲ－』（富山県文化振興財団埋蔵文化財発掘調査報告第14集）財団法人富山県文化振興事業団埋蔵文化財調査事務所
- 大内延介（1986）『将棋の来た道 タイ編1・2』めこん
- 尾本恵市（2002）『日本文化としての将棋』三元社
- 木村義徳（1990）『遊戯史研究』2、遊戯史学会
- 木村義徳（2001）『持ち駒使用の謎 日本将棋の起源』日本将棋連盟
- 小泉信吾（1987）「出土駒からみた将棋の発生」『京都府埋蔵文化財情報』第23号、財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター
- 小泉信吾（1994）「駒の出土例とその意義」『京都府埋蔵文化財論集 第1集』財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター
- 清水康二・小栗明彦（1993）「興福寺旧境内」『大和を掘る』奈良県立橿原考古学研究所附属博物館
- 清水康二・小栗明彦（1994）「奈良 興福寺旧境内」『木簡研究』第16号、木簡学会
- 藤原明衡（1979）「新猿楽記」、山岸徳平他『日本思想史体系8 古代政治社会思想』岩波書店
- 増川宏一（1977）『将棋Ⅰ』（ものと人間の文化史23）法政大学出版局
- 水野和雄（1990）「将棋の流行」『古代史復元10 古代から中世へ』講談社
- 三宅 弘（1992a）「203 将棋史研究ノート（1）－将棋について思う事－」『滋賀文化財だより』No.180、財団法人滋賀県文化財保護協会
- 三宅 弘（1992b）「203 将棋史研究ノート（2）－将棋について思う事－」『滋賀文化財だより』No.181、財団法人滋賀県文化財保護協会
- 三宅 弘（1993）「将棋史研究ノート（3）－王将と玉将－」『紀要』第6号、財団法人滋賀県文化財保護協会
- 三宅 弘（1994）「223 将棋史研究ノート（4）－将棋の伝来と日本化の条件－」『滋賀文化財だより』No.200、財団法人滋賀県文化財保護協会

## 挿図・表典拠

図1 清水他1994に拠り作成。

図2 三宅作成。

表1 小泉1986、三宅1992・1994に拠り作成。

（みやけ ひろし：調査普及課 副主幹）

## 【編集後記】

本号は、当協会設立40周年を記念する特別号として、ボリュームアップをはかり、職員全員に投稿を呼び掛けたところ、総数17本を掲載することができた。

今回は、近年の注目すべき調査事例である東近江市相谷熊原遺跡に関連した3本の論考をまとめ、小特集とした。松室論文では、相谷熊原遺跡を縄文時代草創期と位置づける根拠となった「矢柄研磨器」について基礎的な検討を行っている。重田論文では、相谷熊原遺跡をはじめとする鈴鹿山中の諸遺跡について、選地原理の抽出を試みた。一方、出土遺物のなかでも特徴的な土偶について、瀬口論文では学説史をたどり、その評価の基礎固めをはかった。こうした検討を進めて、次年度以降、調査報告書刊行に向けて、整理調査を行っていききたい。

その他の論考は、時代・対象ともに実に多様なものとなった。縄文時代を対象としたものに、県内出土縄文土器の資料化と検討を行った小島論文、志那湖底遺跡出土岩田第4類土器群について検討を進めた小竹森論文がある。古墳時代では、辻川論文で県内出土埴輪の資料化と検討作業を行っている。古代を対象としたものには、これも近年の注目すべき調査事例－長浜市塩津港遺跡出土起請文木札に関し、基礎的な検討を行った濱論文や、柱穴構造から掘立柱建物の上部構造について意欲的に復元を試みた横田論文、県内に特徴的な飛雲文軒瓦の比較資料として三重県内の出土事例を報告した中西論文がある。中・近世を主な対象としたものとしては、湖南省夏見城遺跡出土毛抜きを位置づけることを目的として、毛抜きをはじめとした全国の化粧道具出土事例に関する検討作業をおこなった堀論文や、東近江市観音寺城遺跡の構造に関して再検討した伊庭論文、出土将棋駒を手掛かりに将棋史の一端に迫った三宅論文がある。さらに、阿刀論文では、滋賀県立安土城考古博物館での展示に携わったなかで見出された「忍者」研究について現状と課題がとりまとめられている。大沼論文では、琵琶湖を「文化遺産」として捉え、様々な側面からそれを構成する「資産群」の文化的価値について評価した結果、人類にとって「顕著な普遍的価値」を有する遺産であると結論付けている。具志堅論文では、当協会が重点的に推進する普及・活用・体験学習の一環として、本年度に実施した体験学習の内容と課題について報告し、中川論文では30年にわたる滋賀県における保存処理を振り返り、現状と課題を整理している。

近年、埋蔵文化財をはじめ文化財に対する需要は多様化し、求められる成果のレベルも高くなってきていることを痛感する。このようなニーズに的確に応じていくためには、職員一人一人の資質の向上が不可欠であることはいうまでもない。埋蔵文化財のみならず、地域の文化財の多様な側面に切り込み、その価値を見出すとともに、それを広く理解していただけるように伝える能力が今まで以上に必要となっている。本紀要も、そうした能力・経験・知識の獲得と蓄積、情報の発信の手段の一つとして位置付けている。

掲載論考の内容は未だ十分なものとはいえないことは承知しているが、読者の皆様には温かいご意見・ご批判を重ねてお願いする所である。

編集担当（T-T）

## 紀 要 第24号 —設立40周年記念号—

---

刊行年月日：平成23年（2011年）3月31日

編集・発行：財団法人滋賀県文化財保護協会

520-2122 滋賀県大津市瀬田南大萱町1732-2

(tel) 077-548-9780 (fax) 077-543-1525 (e-mail) mail@shiga-bunkazai.jp

印刷・製本：三星商事印刷株式会社

**ANNUAL BULLETIN**  
of  
**Shiga Prefectural Association for Cultural Heritage**

**Vol.24 2011.3**

私たちは文化財をとおして  
ゆたかな滋賀づくりに貢献します。



**財団法人滋賀県文化財保護協会**  
Shiga Prefectural Association for Cultural Heritage